

# 音楽という表現の拡がりとともに

2010年11月28日 / 12月19日 / 2011年1月16日 / 11月16日～1月16日 埼玉県立近代美術館

芸術表現は有史以来、刻々と変容を続け、現在にいたっています。つねにその背景には、時代と共に発達してきた文化や思想、科学技術などの深い関わりがあります。もちろん、偉大な芸術家が偉大な作品を作ったことは、何よりその芸術家の力量に負うものです。しかし、何がその芸術家をして、そのような偉大な作品を作らせたのでしょうか。同じような視点で、私たちが聴いている音楽について考えてみましょう。私たちは好きな音楽を自分の自由な意志で選択して聴きます。まさに「今、この曲が聴きたいな」というから聴くわけで、聴きたくない音楽をわざわざ聴くことはないでしょうし、そもそも私たちは聴きたくない音楽のCDやカセットテープをわざわざ所有してはいないでしょう。しかし、「この音楽が聴きたい」という心の動きは、何によって生み出され、聴きたい音楽を選択する私たちの自由な意志は何によって形成されるのでしょうか。このように「音楽」を人間の文化的な営みの全体性として考えてみると、私たちが普段何気なく「音楽」と呼んでいるモノは、実はそのほんのごく一部分に過ぎないのではないのでしょうか。

〈MOMAS空間音響ライブ～音楽という表現の拡がりとともに～〉は一昨年度から続いているのですが、今年度は〈SMFアート楽座〉という全体の企画コンセプトに合わせ、ワークショップとシンポジウムを中心に「音楽」という芸術表現について考えたり、あるいは芸術表現について「音楽」を通して考えたりする場として企画されました。その意味で、特に今回の企画は〈体感する美術〉(p.16-17参照)と対を成すものになっています。音楽と美術の双方が「近代」という時代を通じて、どのようにそれまでの表現から大きく逸脱していったのかということ、そしてその先に「どのような現在があるのか」ということを見つめることが双方に通底するアイデアです。

時代と共に人間の感覚が拡張し、その拡張が芸術表現を変容させる。そして、その芸術表現の変容がまた人間の感性を拡張し、時代を引っ張っていく。鶏が先か、卵が先かという不可解なその状況を良く理解す

るには、その芸術表現に直に触れてみるのが最善の方法であるのではないのでしょうか。このような発想から、それぞれ4つの企画を連動的に実施しました。

## サウンドスケープワークショップ 2010年11月28日 講座室ほか



美術館内部やその周辺環境の「物音」に耳をすませて、それを記憶したり、紙に記述したりして後から思い出すというプロジェクトを実施しました。私たちは普段の生活のなかで「見えているモノしか見えていない」「見えていないことが見えていない」、そういう意識のあり方に気づき、「記憶・記述」と「私たちの経験」との間は完全に連続しているのではないということを経験しました。その自覚をもつことで、私たちのまわりの環境はもっと違ったモノに見えるだろうし、おもしろいことだってまだまだたくさん隠されているかもしれないという問題提起をおこないました。

## 音モニタージュワークショップ 2010年12月19日 講座室

「音を聴く」ワークショップに続いて、「物音」を録音してコンピュータで切り刻んで「音のモニタージュ作品」を作りました。参加者はそれぞれに持ち寄った音楽的な目的のために作られたのではない物品にマイクロフォンを向け、「物音」を録音します。たとえば



輪ゴムや空き缶や櫛などを指や手で触る、その感触から「聴こえる」のはどのような世界なのでしょう。さらに、その音の断片のモニタージュによって「音楽的な動き」を作り出すことができるということは、今まで考えもつかなかったことを考えられるようになっていくといえるでしょう。実際に作品を作ってみることで感性の拡がりを体験していただけたと思います。

## サウンドインスタレーション 『記憶の投影』

2010年11月16日～2011年1月16日  
エントランスホール

美術館は周辺の街や季節の移りとともにあり、またその内部を行き交う人々とともにあります。『記憶と投影』は、美術館が聞いているであろう物音を「サウンド・オブジェ」として、時間のスクリーンに投影するインスタレーション作品です。スピーカーから響く物音が美術館内部に響く現実の物音と交わり合う。記憶としての物音と現実の物音が、既視感(déjà-vu)と未視感(jamais-vu)の狭間を浮遊するような融合を意識しています。

## シンポジウム「音楽という表現の 拡がりとともに」 映画上映『ピエール・シェフェールの 音楽のレッスン』

2011年1月16日 講堂  
パネラーにそれぞれ美術・音楽評論、表



現分野の第一人者である、伊藤俊治さん、沼野雄司さん、成田和子さん、古川聖さんの4名を迎えてのパネルディスカッションでは、「近代」という時代からなぜ芸術表現が大きく変容したのか、そして現在私たちはどのような時代に直面しているのかという討論をおこないました。また、それに合わせてフランスの作曲家ピエール・シェフェール(1910-1995)のドキュメンタリー映画『音楽のレッスン』を上映しました。1948年にシェフェールが提唱した「ミュージック・コンクレート(=具体音楽)」という制作手法は、鉄道から人の声、楽器音までのあらゆる音を録音して、それらを加工・構成する音楽です。この映画は、その実践と表現の意味をシェフェール自身の言葉で綴った記録映画です。

近代以降の芸術の変容として象徴的な出来事は、写真の発明[註1]によって、人々は



Pierre Schaeffer

普段は見えていない視野の隅までがきつりと画面に映り込むことに気づき、結果として人間の無意識領域を表現の題材へと昇華させたことだ(伊藤)という指摘は、その後のフロイトの研究の背景にもつながっていく非常に興味深いものでした。また、写真や録音は、見えたモノや聞こえたことそのものの記録・複製を可能にする技術ですが、複製が今度は表現そのものになっていき、それまでとは異なった新たな「アウラ」[註2]が生じます。そのように記録の手段だった技術が表現手段へと昇華したこと(沼野)は近代の象徴的な出来事であり、その延長上に現在のテクノロジー音楽があると言えます。そして、シェフェールを含め、録音と編集に大きく依存する表現手法の音楽制作過程でマイクロフォンを録音したい物品に近づけるといことは、虫眼鏡で対象物をじっくりと見つめ直すことと似通った行為であり(成田)、それは文字通り「聞くこと」の視点を変えるという大きな意識変革であるとも考えられます。また、昨今のスピーカーから鳴らされることを前提としているテクノロジー音楽にとっては、たとえば絵画のように直に本物に向き合えないと意味がないような鑑賞形態、つまりその場限りのサイトスペシフィックな芸術作品

の経験という形態は減少していく可能性が高いものの、その経験のある種の偽物っぽさそのものから何らかのプリコラーージュ的作品が生み出されていくという可能性は肯定的に捉えてもいいのではないだろうか(古川)という意見も提示され、今後の表現の拡がりの行方が垣間見えたように感じました。

このシンポジウムでは、「聴くための音楽」や「見るための美術」という枠を超えた表現の方向性が期待されるという意見で一致しました。テクノロジーと密接にかかわる表現は、「マルチメディア」の時代から「マルチモーダル(複合感覚的)」な受容へと移行ゆく最中にあります。また、多くの人々がワークショップなどによって直にアーティストの作品に触れたり、自ら制作を行ったり、専門家との討議に参加したりするために美術館を訪れるようになってきています。今回の4つの企画は、まさに美術表現が時代を切り開いていく、その瞬間に立ち会う場としての美術館の機能の拡がりを体感する機会になりました。

[註1] 写真の発明は、1827年から1837年にかけてN.ニエプスとJ.M.ダゲールによる。

[註2] 「アウラ」:「それが存在する場所に、一回限り存在する」「いま、ここに在る」という特性(W.ベンヤミン「複製技術時代の芸術作品」[1935])。「オーラ」と同義。

柴山拓郎(SMF運営委員)

